

《談話室》

## 交わらない三人の モノローグ

「ピクニックの準備」

高山実佐

(三省堂国語教科書編集委員)

「ピクニックの準備」は、最後の学校行事である歩行祭「ピクニック」前夜の思いが貴子、融、「私」の三人を視点にして語られている。

「予報によると、明日はよく晴れるらしい。ラッキー。」(貴子)

「予報によると、明日はとてもいい天気らしい。」

そいつはよかった。」(融)

「予報によると、明日は一日晴天が望めそうだ。」(私)という心内語が始まるそれぞれの語りは翌日の「ピクニック」が幸運に恵まれた一日になることを共通に予感させる。そして、

「みんなで、夜、歩く。それだけのことが、なぜこんなに特別なんだろうね。」(貴子)

「みんなで、夜、歩く。それだけのことがどうしてこんなに特別なんだろう。」(融)

ということばへと収斂されていく。毎日毎日、多くの時間を一緒に過ごしている「みんな」。必ずめぐってくる「夜」という時間。生活の中でごく当たり前に行われる「歩く」という行為。これらの日常を代表するような「それだけのこと」が、三つの要素の重なりにより、非日常の特別な「ピクニック」に変わる。もつとも、三学年の全校生徒が二時間の仮眠をとるだけで丸一昼夜かけて延々と八十キロを歩き通す「ピクニック」

は「特別」な行事であることは確かだ。が、繰り返される「なぜ特別なのだろうか」ということばは、当たり前前に繰り返される日常生活の一コマを、かけがえのない一回性を帯びた非日常的な特別な一コマへと反転させる呪術性を持つ。

同級生でありながら一度も会話を交わしたことがない異母きょうだいの貴子と融。その関係を知っている「私」は、「ピクニック」で「秘密の計画」を実行しようとしている。

「みんなで夜歩く。たったそれだけのことが、どうしてあんなに特別なことなんだろう。今はただ丁寧に一人で準備をしよう。学園生活、そして人生におけるつかのまの『ピクニック』のために。」

という語りで「ピクニックの準備」は終わる。お互いを意識し合っているものの徹底的に避け合っている二人と、それを眺めて「心和む」という不思議な「私」。貴子と融を俯瞰する位置にいる謎めいた三人目の「私」の「秘密の計画」とは何か。交わらない三人のモノローグは、翌日の「ピクニック」で対話へと発展する予感を抱かせながら、「準備」で終わるのである。だれかに向かって語りかけるわけではないモノローグ、個の混沌とした思いのままに表出されることばは、自分という存在の確かさを問う高校生に共感を持って読まれるであろう。

「ピクニック」当日、三人の交差は何を生むのか。「準備」のままに終わる本編を読み、独白から対話へ、個から「みんな」へ、存分に想像しながら教室で楽しみたい。

たかやま みさ 東京都立広尾高校教諭